ラン科の植物を観察して

林　　幸子

４９年７月芦原町の山にコクランがあることを聞いてさっそく見に出かけた。浅い山の松林の中には求めるコクランは見つからなかった。しかしやはりラン科のヒトツボクロがたくさん見つかった。はじめてのもので数株持って帰って花を見ることにした。

５０年５月１８日におもいたってもう一度コクランさがしに芦原へ出かけた。さんざん歩きまわってようやく数株発見できた。やっぱりコクランはあったのだ。花茎はのびているが蕾はまだかたい。一株だけもって帰った。

５月下旬にヒトツボクロが開花し、６月の下旬になって黒紫色のコクランの花が開いた。

コクランは美浜で一度教えてもらったが、その分布は図鑑によると千葉県より西の太平洋側の地方にあるという。この芦原町のコクランはこんな点からみて貴重なものの一つであろう。

５０年６月１日　朝からはげしい雷雨で所によってはひょうが降る悪天候であったが正午頃から回復したので若杉氏に同行して金津方面に出かけた。道々の社叢林をしらべながら歩く。常緑樹がうっそうと繁ったシイの多い林にはムヨウランがある可能性があることを教えてもらってうすぐらい林の中を目をこらしてさがした。予想はあたって蕾であるが見つかった。小さい枯枝がなにげなしにつっ立っているように見える。ふみつけてもわからないようなこのムヨウランは三ケ所ばかり次々と見つかった。目がなれてくるとあちらこちらにつっ立っている姿が遠目にもよくわかるようになった。

５０年６月２３日　ムヨウランの花を見に出かける。梅雨の雨の中を傘をさしながらさがす。しかし花はおわりに近くなってさわっただけでぽろりとおちてしまう。そっと明るい所までもち出して写真におさめる。花の部分が落ちたあとは一見花柄のように見える部分は大部分が子房であることを図鑑でたしかめられた。

５０年９月２４日　再びムヨウランの実を見にでかけた。黒みの強い褐色の光沢のあるやせた果実になっていた。

このムヨウランは若杉氏によるとホクリクムヨウランで、富山県を中心に分布し、ムヨウランと殆ど区別ができないが、このホクリクムヨウランの方の子房上に少数の突起があるのが特徴であると図鑑にある。たしかにわずかであるがそれを観察することができた。

腐生ランであるこのランは現地に何度もかよって観察するよりほかに方法がないが、さいわい駅近くのため一年を通して観察できたのは幸せであった。

５０年６月８日　採集会で会った細呂木の人からサギソウの自生地を教えてもらう。一度見たか

った自生のサギソウに胸躍らせて出かけた。山すその谷の水がわずかに流れでて小さな湿地を作っている所がこのサギソウの自生地であった。まだつぼみであったがあちこちにたくさん見られた。

しかしこの自生地の中には土地の委員会がたてた「サギソウの自生地云々…」というたてふだがアシの繁みにたてられてあった。

本当に保護したいのなら誰にも知らせないでそっとしておけばよいのに、そうすればわたしもふくめて誰もここに足を運ばなかっただろうにと本当の保護のむずかしさを痛感した。はたして9月の初めにここをたずねた時は、花は咲いていたが心なしか少なくなっているように思えた。美しい花は野から人家へと住み家をうつしつつあることを感じた。

この日やはりこのサギソウを見にこられた丸岡中学の三田校長先生に偶然お会いし、この湿地の中を歩いていて小さいトンボがいることに気づき、先生が手づかみにされたのを博物館にとどけられた所これがハッチョウトンボであることを知らされおもわぬ収穫であった。

クモキリソウとジガバチソウは葉しかない時にはなかなか見わけがつかない。

偶然この両者をクモキリソウと思って採集してきて植えた。やがてクモキリソウが花を開いた時はただぼんやり眺めていたのだがその中から少しおくれてジガバチソウの花がでてきた。さっそく図鑑でしらべたら、ジガバチソウの方の葉脈のうち横走する二次脈が明瞭でそれが軽く隆起するとある。そうとわかって観察するとたしかにこの二つははっきり違うものに見えてきた。夏山で花のない時にも見わけがつくように思えた。

本年はこのほかに　ショウキラン、ツチアケビの実（大株）などを観察することができ、見のがしていた、めだたない貴重なものの観察ができたのは若杉氏のご指導によるものと感謝している。

足羽小学校教諭